

《海外研究室事情(13)》

## Department of Applied Mathematics and Theoretical Physics, University of Cambridge

ケンブリッジ大学応用数学及理論物理学科

<http://www.damtp.cam.ac.uk/>

ケンブリッジはロンドン近郊の小さな町。その中心部から郊外に渡り、ケンブリッジ大学のカレッジ・研究機関等の諸施設が散在し、町そのものが大学のキャンパスという感じだ。町の中心から20～30分西北に歩くとニュートン研究所があり、そのすぐ側にDAMTP(応用数学及理論物理学科)の新しい建物が建てられた。現在、DAMTPとDPMMS(純粋数学及数理統計学科)は町の中心のSilver St.から移転中であり、ニュートン研究所と3つ併せ、数理科学センターという組織になった。妙に現代的な建物群は、数百年前の建物が並ぶ中世の雰囲気漂うケンブリッジには似合わない。今もまだ建設中で、大部分のグループと設備はまだSilver St.に残っているという中途半端な状態だ。引越が完了するのは2002年になるらしい。

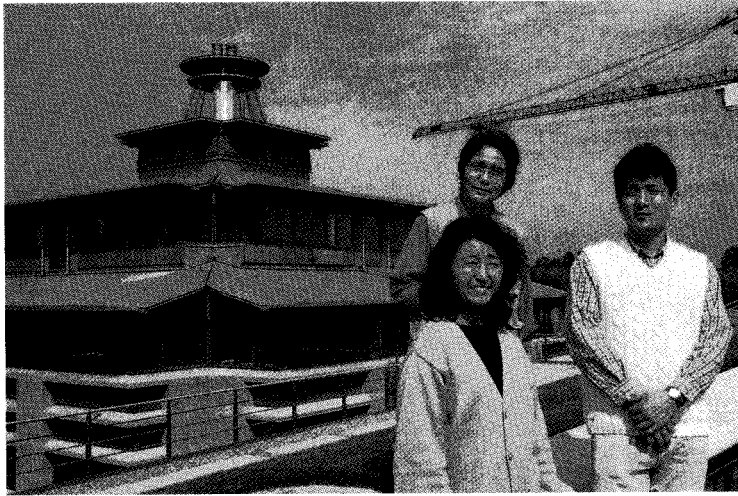
私は、今年の3月にDAMTPを訪れたが、宇宙関係の研究グループは新しい建物に移ったばかりで、研究環境は最悪であった。スタッフには1人1台端末が与えられているのだが、ビクター等が共同で利用できる端末はたった2台しかなく、使いたい時に使えない状態だ。更に、個人のパソコンはセキュリティ上の理由でLAN接続が許可されず、また、ビクターの研究室には電話回線がないのでモデム接続もできない。言うまでもなく端末が使えないと、メール、プレプリント入手、数値計算、論文作成等、研究の大部分ができない。では学術雑誌を読もうかと思っても、図書室はまだ移転されてなく、Silver St.まで30分近く歩かなければならない。全く不自由な状態であった。

当然、計算機管理者と受入研究者のJ. Barrowに苦情を言った。管理者は、近々端末を数台購入し、電話回線も業者に早く設置させると答えたが、帰国までの4ヶ月間何も改善されなかった。Barrowからは逆に、君のために端末(約£900)を購入するから席料として年間£1500(約26万円)払え、と催促される羽目になった。

他に、電話が研究室になく、構内に公衆電話もないのは不便だった。思えば、前任地の京都大学基礎物理学研究所にも公衆電話がなく、国際電話がかけられず不自由な思いをしたことがある。私も外国人の立場になって初めて痛感したわけだが、基研に滞在する外国人や研究会参加者も公衆電話の設置を望んでいるのではないだろうか。所員は自室で国際電話もできるので気にならないのだろうが、共同利用機関と称するからには公衆電話を設置すべきだと思う。

さて、DAMTPは約20の研究グループから成り、宇宙物理関係は、高エネルギー物理(HEP)グループ、相対論・重力(GR)グループ、宇宙流体力学・非線形力学グループの3つである。最近ではS. Hawkingらの影響で宇宙物理色が濃くなったが、もともと流体力学の研究所だったらしく、今でもほとんどのグループが流体力学関係である。DAMTPには日本人研究者が他に3名滞在していたが、1人は地球物理、2人は工学系の分野であった。

私の専門は宇宙論・相対論であり、HEPグループに属した。Barrowの他にはN. Turok, M. Bucherらが所属している。一方、GRグループ



DAMTPのメインホール屋上にて、後ろの建物にHEPグループが入っている。見学に来た妻・母と撮影。

には Hawking, G. Gibbons らが属しているが、両グループの研究分野に明確な境界はない。HEPグループの活動は火曜の Cosmology Lunch というセミナーだけだが、みんな興味のある話しか聴きに来ないので、閑散としていることが多い。基本的には各自が好きなように研究し、議論したいときにするというスタイルだ。ただ、理論物理研究とは大体そのようなもので、雰囲気は京大基研とそれ程変わらないと思う。

**L**AN接続が禁止されているように、全般的にセキュリティには厳しい。夜間は、警備員がしばしば見回りに来る。廊下には幾つもの扉があり、夜間及び休日にはロックされ、屋内を移動するのに何度もカードキーを通さなければならない。私は、研究室にキーを置き忘れて困ったことが数回あった。しかし、このように防犯対策が徹底しているせいか、治安は極めて良いようだ。夜中の0~3時でも、1人歩きの女性をよく見かけた。こんなに無防備に生活できる場所は、日本でも少ないのではないだろうか。

**研**究環境には不満が多かったものの、このような治安の良さに加えて自然環境も良く、ケンブリッジでの生活は素晴らしいものであった。

3月末から少しずつ暖かくなり、色とりどりの花が咲き、朝は小鳥のさえずりで気持ちよく目覚め、公園には牛が放され、小川にはあひるや白鳥が遊ぶ。緯度が高いため日暮れが遅いのは当然だが、実際に体験するとしばしば感動する。夜間照明なしでサッカーができる。パブでビールを飲み、21時過ぎに外に出てもまだ明るい。旅行で夕方目的地に到着しても、それから周辺を散策できる。6月は22時半頃まで日が暮れない。春から夏にかけてのケンブリッジは、楽園のようである。

**ケ**ンブリッジには日本人を始め外国人が多く集まっている。英国人一人一人は外国人にとっても親切だ。しかし、

組織的には群がる外国人からまとまったお金を吸い上げようとする姿勢が感じられる。ケンブリッジに滞在する日本人研究者の多くは、私と同じように多額の席料を請求されている。カレッジの日本人学生は、英国人の何倍もの授業料を払わされている。また、市役所は住民税を正規より多めの額で請求してくる。これらの請求に素直に応じる必要はない。私は交渉して、席料も住民税も払わなかった。

**と**ころで、私は日本学術振興会海外特別研究員として3月20日から2年間滞在する予定であったが、3月23日に山形大学から教官採用の連絡を受けた。あまりのタイミングの悪さに、嬉しいというより間の抜けた感じであったが、ポスドクの身分として就職の機会を逃すことはできない。7月に赴任することになり、私の英国滞りは約4ヶ月で終わった。この短期間に私が見たDAMTPは、移転直後で特殊な状態であったと思う。しかし、海外生活に苦勞や不満はつきもので、それを率直に伝えることもまた意味があると思ひ、本稿を執筆させて頂いた次第である。

坂井伸之

(山形大学教育学部理科教育講座)